

## 学部創立20周年を迎えて：「学際的な学部」の在り方をめぐって(20周年記念特別号)

著者名(日)	前納 弘武
雑誌名	大妻女子大学紀要. 社会情報系, 社会情報学研究
巻	21
ページ	viii
発行年	2012
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00005743/">http://id.nii.ac.jp/1114/00005743/</a>



# 学部創立20周年を迎えて ——「学際的な学部」の在り方をめぐって

大妻女子大学

前社会情報学部長 前納弘武

社会情報学部創立20周年の記念すべき節目を迎えました。誠に喜ばしく心からの祝意を表したいと存じます。20年といえば、学部創設の頃に生まれた人たちが、今や2年ないし3年次生として在学していることになり、過ぎし時の流れの速さに瞠目せざるをえないのであります。また、20年という歳月は、人間で言えば誕生から成人に達する年齢であることを想えば、社会情報学部も、これまでは未成年扱いで甘やかされていたところもあったかも知れませんが、今後は、自立した立派な大人としての途を辿って行かなければなりません。

20年前、学部創設のために一同に会したスタッフも、今ではめっきり少なくなっていました。当時は、社会情報学部の在り方、就中、社会情報学の在り方に関して、内外の関係者の間で種々活発な議論が展開されました。その間の経緯を記録に残す意味も込めてここに若干触れておきますと、本学部の開設は1992（平成4）年4月ですが、この年度の終わる1993年3月に、札幌学院大学で、「社会情報研究の現段階と課題」と題する東京大学との合同研究会が開催されました。これをステップにして、翌1994年9月、今度は東京大学に場所を代えて、「組織・研究・教育の課題」と題する「社会情報学シンポジウム」が開かれました。さらに翌1995年、3回目は群馬大学を会場に、「社会情報学シンポジウム—その学際性と実証性を求めて」という研究会が持たれました。この3年間の蓄積を土台にして、日本社会情報学会（JSIS）と称する学会の設立に至り、その第1回目の研究大会が、1996年、大妻女子大学を主催校として開催されたことは未だ記憶に残るところであります。社会情報という言葉に冠するそれぞれの組織が順番にそれぞれの仕事を担ってきたわけです。

これらの数年に渡る議論のなかで、一番肝心の問題、つまり、「社会情報学とは？」という問題について様々な議論が交わされて来ましたが、とりわけ、「学術用語としての社会情報学」の在り様について、第3回シンポジウムの報告のなかで今は亡き吉田民人氏は次の4つの考え方に整理されています。その一つは、日常生活のなかで人々によって伝達され、意思決定を規定する「自然言語としての情報」一般を対象にする研究。二つは、そのうち特に、メディアによって担われる情報を対象にする研究、マスコミ研究はその原型であり、今ではインターネット関連の情報もこの系列に入れることができるでしょう。そして三つは、高度情報社会の学際的・総合的研究。四つは、一つの社会科学の *discipline* としての社会情報学。この4つの系列を念頭におけば、本学の社会情報学部は三つ目の「高度情報社会の学際的・総合的研究」を軸に、文系と理系から成る学際的な学部を目指して発足したものとみることができます。

さて、この20年を振り返って、いつも私の念頭を去らない思いは、「高度情報社会の学際的・総合的研究」を目指す学部の組織化というものは如何に困難であるか、という一点にあります。というのは、学際的・総合的な学部組織の場合、構成員たる個々の教員の立場からすれば、各自の有する既成の *discipline* に基づいて応分の貢献をすればよいというスタンスになり、そのため、学問的な *discipline* 構築の課題は学生の側に廻されることになり、結局その課題を背負いきれない多くの学生は結局何を勉強しているのか分からない、という状況に陥りがちなのであります。

そのような状況を突破して、新たな学部理念のもとに今後の社会情報学部の再組織化を図っていただきたい、というのが20周年を迎えた今、私の胸に去来する思いであります。今後の発展を切に祈っております。